

認知症の人をご家族とケアスタッフで看取る

看取りケア、三つの物語

ここにしかない、
豊かな時間を

東京都健康長寿医療センター研究所
認知症高齢者のエンドオブライフ研究プロジェクト
井藤佳恵・宮前史子・小野真由子

同じ物語は二つと存在しない、人の一生。

その最終章もまた、同じ日は二度とこない物語の一頁です。

認知症であってもなくても、エンドオブライフは、

その人の人生が結晶化してゆく、貴重で尊い時間です。

この時間が、三つの物語で紡がれていくときに、

“かけがえのない看取りの時間” がうみ出されていることがわかりました。

❖三つの物語❖

「あなた」のなかの物語

二者の物語「あなたとその人」

三者の物語「あなたとその人とご家族」



認知症の人を施設で ご家族と看取るあなたへ

(研究責任者)
東京都健康長寿医療センター研究所
福祉と生活ケア研究チーム 介護エンドオブライフ研究
井藤佳恵

高齢者施設から入院される患者様に付き添っていらっしゃる職員の方から、ご本人が入所時に示された「延命治療に関する希望」を提示されることが増えました。死を忌むことなく、終末期ケアの希望を語る方の思いに耳を傾けることは大切なことだと思います。

でも、あらゆるケアは、人生の幕をおろすまでどのように生きるのか、その希望を支えることが本来の目的だと考えています。いつかその人が人生の幕をおろす日がくることを認めながら、その日まで生きる生を考える。そして最期の日まで流れる時間を、あなたが大切にケアしているその人と、その人が生涯大切につくってきたご家族、そしてあなたの間で、慈しみをもって分かち合うために、あなたが紡ぐであろう三つの物語を考えました。

認知症の進行と三つの物語

看取りケア、三つの物語は、ご本人の認知症の発症から始まります。

徐々に認知機能障害や生活障害が進行し、身体機能が低下して、
ことは数が減ってきます。そろそろ看取りのステージに近づいているサインです。

ご本人の変化とともに、はじめは理解できずにとまどっていたご家族も
認知症のことを知り、不安を抱えながらもやがて現実と折り合っていきます。

そこから数年。看取り期が近づいているという実感はなく、
現実と理解のギャップを埋める手助けが必要です。

ご本人、ご家族のこのような時間のなかで
職員の役割と関係も変遷していきます。

そんな看取りに向かう時間の流れとともに、
三つの物語が紡がれてゆくのです。



「死」の受容

「あなた」のなかの物語

誰にでも死はやってくる

誰かのエンドオブライフに向き合う前に、死を思い、死は誰にでも訪れる当たり前のステージだということを思い出してください。人生の物語の最終章が死であることをあなたの心が受け入れることで、人の死から大切なものを感じ取る心の準備ができます。

死は生の最後の日

生きていれば必ずくる死。生と死はつながっています。看取りの日は、変わりなく続く毎日の最後の日です。いつその日が来るのかわからないからこそ、大切な一日一日の物語とともに紡いでいるあなた自身に気づくのです。

現場で うまれていた 体験と物語

自分が死ぬことを考えると、怖いけど、そんなにダークではなくて…

認知症だった方が静かに亡くなって逝くのを見て、みんなに好かれて、ああ幸せな終わり方だなあ。こういうふうになりたいなと思えたことが。

淡々とした日常の終わりとして、みんな頑張ったね。本人が一番頑張ったねって。じゃまたいつかみたいに言えて、お別れできて。

枯れて死んでいくって言うんでしょうか。食べたり飲んだりできなくなると、人はこういうふうに亡くなっていくんだなって、見せてくれた方がいます。

日常生活の最後の日としてその日は訪れ、多様な死に触れながらも、そこには人の「生と死」を深く受けとめていく時間が流れていました。

共感的関係

二者の物語

「あなたとその人」

相手への人間的共感

認知症の進行とともに変化していく症状を理解する。同時に、その人の“人となり”に目を向ける。すると、ケアの関係性は一方的なものだけではなく、もらっているものがたくさんあることに気づきます。相手を深く知るほどに、ここにしかない共感的関係を紡いでいる物語が見えてくるはずです。

見えない思いも受けとめる関係

私たちは、エンドオブライフという、その人の生の終わりを意識する時間を共有しています。その時間のなかで交されることば。その裏に潜むさまざまな思い。看取りは、ことばにされない思いも受けとり、残される人に託す役割を引き受けることでもあります。

現場で うまれていた 体験と物語

その方は気が強くて、嫌は嫌。こちらからはじめは嫌だったけど、不安や苛立ちの表出だと理解できるようになりましたね。

だんだん他人から身内になってくるのかな。

少しここに慣れてきて、不安にならないように気づかっていたら、実はとても社交的な方でね、とりつくろいまで社交的でした。

最後は、ただ、にーって笑うだけになったけど、気持ちが伝わってきて。

少し前までは看取りは病院のなか。自分たちには見えないブラックボックスのなかでした。それが今は自分たちが現実のシーンとしてそのなかで、大切な役を演じているんだなってわかってきました。

生活(生きている時間)を共有し、ことばにしなくても、今は看取り(death & dying)に向かう時間であるという意識も共有することで、見えない関係がうまれてくるようです。

三者の共同作業

三者の物語

「あなたとその人のご家族」

三者で紡ぐ最終章

ことばが減ってきました。残された時間はもう長くはありません。でも、ご家族は、もの忘れが進むことと身体機能が衰えていくことがなかなか結びつきません。そしてようやく看取りのときが近いと共有できると、今度はご家族の希望に気をとられがち。ここは、その人が置き去りにになっていないか、問いかける章です。

まんなか、その人

大切な人だから、残された日常にできる限り寄り添いたい。そんなご家族の負担を減らすのも一つの役割。でも、ご家族の役割を残すことも、やり直せない時間だからこそ大切です。あなたが、その人のご家族の思いをつなぐ架け橋になって、その人がまんなかにいる物語の最後の頁を綴ることができたとき、あたたかな人生として、物語が終着するのではないのでしょうか。

現場で うまれていた 体験と物語

そのご主人は奥さんの認知症をなかなか受容できなくて、同時にケアを託すことにもなじめなかったけど、ご本人が私たちを頼ってくれるようになって変わりました。

ご家族の希望が、ご本人の希望だと思っていたこともある。

最後はおうちに帰って。ご家族もおっかなびっくりだったのが、リラックスしてあたたかく取り囲んで、自分たちの生活を守りながら平静に時間を過ごして。

ご本人もご家族のその様子を実はみんなわかっていたと思う。自宅にいるのもわかっている、自分で静かに幕を引いたんじゃないかな。

人はみな、自分の人生の物語の主役です。その人も、ご家族も、あなたも。そんな三者の共同作業として看取ることができたとき、その人が教えてくれる「生と死」の大切な何かを受けとることができるのです。